

訂正

「言語文化」第三五号（二〇一八年三月三十一日発行）二五〇ページの記事に誤りがありました。

上段10行目

誤…望郷の念を

正…撤退命令反対の気持ちを

ホメーロスと嘘

生田康夫

まえがき

『イーリアス』最終歌で、息子ヘクトールを喪った老王プリアモスはこう言つて慨嘆している。

おお、わしはなんと不幸なのだ。広きトロイアで優れた息子達を生んでおきながら誰も残っていない。神に比すべきメーストル、馬の勇者トロイロス、そしてヘクトール。彼ヘクトールは人々の中にあつて神だった、死すべき人間の子とは思えなかった、いや神の子だった。彼等を軍神アレースが斃してしまった。恥知らずばかりが残っている。嘘つきと踊り手と合唱上手と、そして自国の仔羊と仔山羊の略奪者だ。(『イーリアス』第24歌255～262行目)

恥知らずな息子たちの筆頭に「嘘つき *yeutorai*」が挙げられている。

またこんなどりもある。

刎頸の友パトロクロスを喪つて悲しみに沈むアキレウスを母女神テティスが訪れる。テティスに海神ネーレウスの娘であるニンフ達が付き従ってくる。そのニンフ達の名として、全部で三十三の名前が列挙される(『イーリアス』第18歌39～49)。例えば、*Thukin* (輝き)とか *Kuipōn* (速き波)とか多くは海の景を連想させる美しい名前のだが、その中に *Ayēuthē* (「否定辞 *A* + *yeuthē*」であり「嘘無き女」とでも呼ぶべきか)がある。(註一)

りのように、*weptōtai*（嘘つき）が罵倒の対象であり、*Aueuhg*（嘘無き女）が美称であることは、ホメーロスにとつて嘘偽りがやはり悪しきものであったことを示しているようだ。しかしながら、このことはホメーロスの詩篇が描く世界に嘘偽りが稀であることを意味しない。逆である。

『オデュッセイアー』での漂流中、詩人はオデュッセウスに対してパイエーケスの王アルキノオスにこう言わしめている。

おオデュッセウスよ、拝見するにあなたは決してでまかせを言う輩や詐欺師だとは思いません、黒い大地は出所不明の嘘をこしらえ上げる人間を沢山育て撒き散らしていることだが。（『オデュッセイアー』第11歌363〜366）

嘘の得意なオデュッセウスに向かつての言葉だから片腹痛い。アルキノオス王にそのつもりがあつたとは思われぬが事実は相当地皮肉である。

このアルキノオス王の言のとおり、ホメーロス両詩篇には様々な嘘（そして偽りや騙し）にまつわる言動がある。その多彩さ・豊かさはホメーロスの魅力の一つだ。主要な例を吟味しながら、嘘の面からホメーロスを観察してみよう。

A. 人を騙す神

オリュンポスの神々の顕著な特徴の一つは平気で嘘をついて人を騙すことだ。

A1a ゼウスがアガメムノーンにおくる偽りの夢

『イーリアス』でも第二歌冒頭に早速その場面がある。如何にしてテティスの願いを叶えるか（ということとは、アキレウスの恥を雪ぐべく如何にしてアカイア勢を懲らしめるか）を思案したゼウスは、アガメムノーンに偽りの夢を送ることにする。そして夢の神に言わしめる。

すぐさま髪長きアカイア人に戦支度を命じよ、今やトロイア人の道広き町を落とすことが出来るのだから。というのももはやオリュンポスに住まいする神々は思いを異にしない、ヘーレーが皆に願って説得したのだ、トロイア人には禍がもたらされたことよ。（『イーリアス』第2歌11〜15）

全くの作り事である。嘘に信憑性を与えるために、ヘーレーがトロイア最員の神々を説得したと、まことしやかな説明まで加えている。

A—b アテーネーのヘクトールに対する騙し

女神アテーネーも嘘を言ってヘクトールを陥れる。ヘクトールがアキレウスに追われ逃げ続けていたときだった。アテーネーは異母弟デーイポボスの姿を借りてヘクトールにこう語りかける。

兄弟よ、まったく速きアキレウスはお前を苦しめているな、
プリアモスの町の周りを速き脚で追いまわして。しかしさ
あ我等はとどまって待ち構え戦おうではないか。〔イー
リアス』第22歌 229～231〕
まんまと騙されたヘクトールに対しさらに続ける。

兄弟よ、父も母御も次々に膝にすがって大いに懇願したものだ、
周りで仲間達もだ、そこに留まるようにと、それほどまでに皆恐れていたからだ。しかし私の内なる心は辛い
苦しみに苛まれていた。今はまっしぐらに勇んで戦おう、
槍に容赦は無用だ。アキレウスが、我等を殺して血まみれの
獲物を虚ろな船に持ち帰るか、逆にお前の槍に討ち取られるか、
見届けるために。〔『イーリアス』第22歌 239～246〕

ここでも父母の制止・嘆願を振り切って、などともっともら

しくもあり恩着せがましくもある補足をしている。聴衆・読者としてはヘクトールに同情しアテーネー神に反感さえ覚えかねないところだ。

B. 神を騙す神

オリュンポスの神は人をもみならず神をも騙す。

B—a ゼウスを騙すヘーレー

『イーリアス』第十四歌は「ゼウス騙し」と副題されている。即ち女神ヘーレーによるゼウス騙しの段だ。

ヘーレーはゼウスによってアカイア勢が窮地に陥っていることを座視できず、何とかゼウスの目を盗んでアカイアに加勢できないうものかと焦慮する。そこで一計を案じる。

牛の眼の女神ヘーレーは考えた、如何にしてアイギス持つ
ゼウスの心をまどわそうかと。彼女の心にこの考えが良策
と思えた、(すなわち)彼女自身をよく着飾ってイーデー
山に行くことが、そして彼に彼女の肌の脇で愛の添い寝を
する欲を掻き立て、その臉と敏き心に憂い無く柔らかき眠
りを注ごうと。〔『イーリアス』第14歌 159～165〕

B—b アプロディーテーを手玉にとるヘーレー

次いで愛の秘薬を得るべく、愛の女神アプロディーテーにこ
う嘘をつく。

さあ私に、それによってあなたが全ての神と死すべき人間
を征服する、愛と憧れとを下さいな。というのも私は豊か
な大地の果てに神々の源たるオーケアノースと母なるテー
チユスに会いに行くのです。……彼等に会いに行つて、そ
の限りなき諍いを解きたいのです。既に彼等は長い間お互
いに臥所も愛も交わしていないのです、心に怒りが入りこ
んでからは。（『イーリアス』第14歌198～207）

アプロディーテーは一も二もなく応ずる。いそいそと「愛の紐」
を取り出してヘーレーに与える。嘘と知つてか知らずか、明確
ではない。もつともアプロディーテーにとつてはどつちでもい
いのかも知れない。なにしろ愛の業に関われるなら嬉しくてし
ようがないのだ。この「愛の紐」のお陰でヘーレーは「ゼウス騙し」
にまんまと成功を取める。もつとも、続く第十五歌冒頭では目
覚めたゼウスに早速こつぴどくどやしつけられることになるの
だが。

C. 姿を偽る神

さて、先に挙げたアテーネーがヘクトールを陥れる場面（A
—b参照）では嘘をつくに先立ち、ヘクトールの異母弟デーイ
ポボスに扮し姿を偽っている。ここでのように言葉で偽らない
までも、人間の面前に出るにあたって姿を偽ることは神の日常
茶飯事だ。これ自体一種の嘘だろう。

C—a カルカースに扮するポセイダーオーン

それは必ずしも相手の人間を陥れるためではない。
例えば、ポセイダーオーンは鳥占師カルカースに扮してアカ
イア勢に呼びかける。

だが大地を支え揺るがずポセイダーオーンが深き海から
やつて来て、カルカースに姿と囁れることなき声で以て似
せて、アルゴス人達を励ました。（『イーリアス』第13歌
43～45）

「似せて εἰδόμενον」と言っている。姿を偽るときの常套句だ。
ここでポセイダーオーンの変装はアカイア勢に味方し、その
利益を計つてのものだった。

C—b 客人に扮するアテーネー

『オデュッセイアー』でも女神アテーネーがあるときはテレーマコスの、あるときはオデュッセウスのために、後見人よろしく姿を変えて出てくる。一つだけ例を挙げよう。

第一歌でアテーネーは客人の姿で玄関先に立つ。テレーマコスが気づき招き入れてもてなし、どなたかと問う。アテーネーは答える。

されば私はそなたにそれをありのままに申し上げよう。私は聡き心のアンキアロスの子メンテースと名乗る者、權に親しきタピオス人を統べる者である。〔オデュッセイアー〕

第1歌179～181)

「ありのμαφε ἀποκείασι」といいながら全くの作り話だ。ただそれはテレーマコスを励まし、父オデュッセウスの消息を求めて旅することを勧めるためだった。

以上二例いづれも「騙し」ではあるのだが、陥れ、相手に不利益を与えるものではない。これらは嘘や騙しが必ずしも悪意と不可分ではないことの証左である。

神々は人間の前に現れるとき殆どの場合この騙し(扮装)の手を使う。しかし例外もある。『イーリアス』第一歌でアテーネーはアキレウスの前に女神そのままの姿で現れる。アキレウ

スが怒りのあまりアガムメノンに対しあわや剣を抜かんとしたときだった。

(アキレウスが)鞘から大剣を抜かんとした、その時天からアテーネーがやって来た。白き腕のヘーレーが送ったのだ、両者を愛し心配して。背後に立ちペーレウスの子の金髪を掴んだ、彼一人に姿を見せて。他の誰も見なかった。アキレウスは驚き振り向いた、すぐにパッラス・アテーネーだと覚った。両の眼は恐ろしく輝いていた。〔イーリアス〕

第1歌194～200)

「両の眼は恐ろしく輝いていた」とある。神の姿を面と向かつて見ることは稀であり恐ろしいことなのだ。

D. 人間も姿を偽る

姿を偽るのは神々の専売特許ではない。人間も変装することがある。

D—a オデュッセウスの変装

『オデュッセイアー』のオデュッセウスは第十三歌から第二十二歌まで乞食に身を賣し続ける。言うまでもなく求婚者達を欺くためだ。

第十三歌で故郷イタケーに戻ったオデュッセウスの姿をアテーネーはこう変える。

しなやかな手足の美しい肌を干からびさせ、頭からたれる金髪を傷め、手足の皮膚を全て老いほれ老人の皮膚とし、かつて輝いていた両眼を濁らせ、彼の周りには別の汚い襤褸と破れ汚れ酷い煤が染みついた肌着と、脚速き鹿の毛の抜けた皮をまとわせた。そして彼に杖とみすぼらしいボロボロの袋を持たせた。(『オデュッセイアー』(第13歌430〜438))

実に念入りな変装である。『イーリアス』には戦いに出で立つ勇士の武具を鎧う様の念入りな描写がある。それと好一对だ。身につける物もそうだが、手に携える物も、片や槍と楯に對してここでは杖と襤褸袋だ。ここにも『イーリアス』と『オデュッセイアー』の対照がうかがえる。

オデュッセウスは第二十二歌冒頭でいよいよ求婚者討伐に立ち上がったとき、ようやくそのぼろを脱ぎ捨てて。

さて、謀に富むオデュッセウスは襤褸を脱ぎ捨てると、槍と矢でいっぱい矢筒を持って大きな敷居に飛び乗った。そして速き矢をその足下にぶちまけると、求婚者共に言った。(『オデュッセイアー』第22歌1〜4)

この長きにわたる変装は『オデュッセイアー』の主題である「認知」と裏腹の関係にある。変装の最中にも認知される瞬間があった。媪エウリュクレイアが乞食の足を洗ったときだった。足に昔の傷痕を見つけたときだった。傷痕までは変装しようがなかったのだ。

D1b パトロクロスの変装

『イーリアス』ではパトロクロスが戦線復帰を拒み続けるアキレウスに代わって出陣する。その出陣に際しアキレウスの武具を着ける。これも一種の変装だといえよう。

せめて私をすぐに送り出してくれ、そしてミウルミドーンの他の者共を付けてくれ、私がタナオイ人達への救いとなることが出来ないとも限らぬ。そなたの武具を鎧うべく与えてくれ、私をそなたと見間違えて「ἰοκρῆτες」トロイア勢が退却するやもしれぬ。(『イーリアス』第16歌37〜42)

この変装はネストールの知恵でありその勧めに応じたものだった。第十一歌にはネストールがパトロクロスに「そなたを彼と見間違えて「ἰοκρῆτες」トロイア勢が退却するやもしれぬ(11799)」と言っていた。それを人称を代えてそのままなぞったものだ。

ここで「見間違えて「ἰοκρῆτες」と言う言葉を使っている。姿

を偽る側は先にあつた「似せてεἰσάγουσ」(C—a)、相手側は「見間違えてτοκότες」騙されるのだ。

この扮装の効果は観面だった。

トロイア勢は、メノイティオスの勇敢なる子(パトロクロス)を、その本人と従者を輝く武器と共に見るなり、皆心が動揺し、隊列は乱れた、船端で脚速きペーレウスの子(アキレウス)が怒りを捨て和陸を選んだと思つたのだ。誰も皆どこへ破滅を逃れようかとあたりを覗つた。(『イーリアス』第16歌278～283)

戦場に於いては顔を見分けるのは容易ではない。まず武器をもつて誰であるかを判断したのだから。

E. 出自を偽るオデュッセウス

『オデュッセイアー』におけるオデュッセウスは姿を偽るのみではない、出自を問われ度々嘘で答える。その嘘はいくつか興味深いパラドックスを含んでいる。

E—a 「自分の名はダレモオラヌ」

漂流中、単眼の巨人キュクロープスにどこから渡つて来たか問われた時、オデュッセウスは

我々はトロイアから漂流してきたアカイア人です(『オデュッセイアー』第9歌259)

とこの点つては正直に答えている。しかし名前を問われた時は、会心の嘘をついている。

キュクロープスよ、世に知られた私の名をお尋ねですね、申しませう、あなたの方も私を約束通り欲待して下さい。私の名はダレモオラヌです。ダレモオラヌと私を呼んでいい、母も父もそして仲間達も。(『オデュッセイアー』第9歌364～367)

この嘘はキュクロープスには悲嘆を、オデュッセウスには快哉をもたらす。キュクロープスがオデュッセウスに一つ目を潰されて仲間達に助けを求めた時、仲間達は問う。

何故それほど、キュクロープスよ、どんな目にあつたからと言つてそれほど叫ぶのだ、聖なる夜に、我々を眠らせずして。誰かお前の羊たちを無理矢理連れて行くこととするのか、それとも誰かお前自身を術策か暴力で殺そうとでもするのか(『オデュッセイアー』第9歌403～406)

キュクロープスは答える。

仲間達よ、術策でも暴力でも俺を殺そうとする奴はダレモオラス（『オデュッセイアー』第9歌408）

これを聞いた仲間達は

もし独り住まいのお前に乱暴する者が誰もおらぬのなら（定めし病気であろう）、大いなるゼウスからの病気は避けようなきもの、父なるポセイドオン神にでも祈ることだな。（『オデュッセイアー』第9歌410～412）

と言つて去つて行く。

名前が「ダレモオラス」だ。名は存在を示すものであるはずなのにその名が「非存在」であるとは、形而上的のパラドックスだ。

E—b 「自分はクレイター人である」

イタケーに帰還して後、オデュッセウスは度々出自を問われる。女神アテーネー、豚飼エウマイオス、求婚者、妻ペーネロペイア、父ラーエルテースからだ。その内、アテーネー、エウマイオス、ペーネロペイアの三者に対しては出身地をクレイターだと偽っている。

エウマイオスに対する答を例としてあげよう。

私は憚りながら広きクレイターの出身で、富裕な人の息子

です。（『オデュッセイアー』第14歌199～200）

なぜクレイターなのか。A. Hoekstra は、クレイターが当時の人にとって魅惑的な島であったこと、冒険的航海者のいる島として有名であったこと、そして、名門の出であることを言うためには遠い島である方が（嘘隠蔽上）安全であることなどを挙げている。²⁾合理的な説明である。しかし「クレイター人は嘘つきだ」伝説を踏まえた答との解釈もある。これが面白い（ホメーロスは、他の場面でもしばしばその真偽を知つてか知らずか、敢えて民間伝説や民間語源説を活用している）。すると、「自分は嘘つきのクレイター人であると嘘をつく」という愉快なパラドックスとなる。

E—c 「自分に会った」

オデュッセウス扮するところの乞食が「オデュッセウスに会った」と言う、これは皮肉で劇的な嘘だ。「自分に会った」と言うのだから。

この「自分に会った」との嘘をついたのは、エウマイオス、ペーネロペイア、そしてラーエルテースに対してだった。それはオデュッセウスの嘘をどう受け取ったのだろうか。

E—c—1 エウマイオスは信じない

まず、エウマイオスは根っから信じない。それは苦い経験か

ら来ているようだ。以前オデュッセウスについて嘘の知らせを
もたらした男がいたのだ。

彼等はその男に傍らで色々問いただすのだ。長い留守の殿
に心を痛めている人達、あるいはその財産を散々食い散ら
している奴達だ。しかしわしは、尋ねるのも問いただす
のも好まぬ、アイトーロスの男が言葉でわしを騙してから
というもの。〔『オデュッセイアー』第14歌375〜379〕

そして更に言う。

嘘でわしを喜ばせようとするな、惑わそうとするな。とい
うのも、わしはそんなことであんたを敬ったり大切にす
るのではない、主客の誼の守り手ゼウスを恐れ、またあんた
を哀れんでのことなんだから。〔『オデュッセイアー』第
14歌387〜389〕

施し物のほしさに耳障りのいい嘘をつく男がいたのだ。

E—c—2 ペーネロペイアは確かめようとする

ペーネロペイアは「オデュッセウスに会った」の言葉が真か
否か確かめようとしてこう問う。

話して下さい、彼が肌に纏っていた衣服がどんなであった
か。〔『オデュッセイアー』第19歌218〕

オデュッセウスはこう答える。

深紅の毛の二重の上着を神の如きオデュッセウスは羽織つ
ていました。その留め金は、黄金で作られ二本の管の形、
前面には細工が施されており、犬が前足でばたつく斑模様
の鹿を睨みながら捉えていました。皆それを見て賛嘆しま
した。〔『オデュッセイアー』第19歌225〜229〕

次いで下着の様まで語る。それら全て、嘘をつきつつまぎれ
もない真実を語っている。実際に会った人かその人本人しか知
り得ない真実だ。あらゆる細部が真でありながら全体が偽であ
ることがある。

更にこんなことまで付け加える。

オデュッセウスがそれらを家で着ていたのかどうかは知り
ません、誰か仲間が航海中に贈ったものか、あるいは客人
がか、というのもオデュッセウスは多くの人に好かれてい
たので。あのような方はアカイア人の中に稀でした。〔『オ
デュッセイアー』第19歌237〜240〕

それはペーネロペイアが立出時にてずから渡した衣類だったのだから、まことしやかなとほげだ。ゼウスやアテーナーによる、嘘に信憑性を与えるための脚色の例が想起される（A— a、b 参照）。「嘘」の点でもオデュッセウスは「神の如きオデュッセウス *ὅς ὡς θεῶν*」である。相手が本人だとは夢思わないペーネロペイアが手もなく騙されたのはむりもないことだった。

E—c—3 ラーエルテースはすぐさま信じる

最後に、最終歌でラーエルテースのもとに行き、（旅人に扮した）オデュッセウスは故国でオデュッセウスを歓迎し、別れから五年になると言う。

しかるに今年は五年目になります。オデュッセウスがそこから出立し私の故郷を離れてから。不運なる人よ、彼の出発時の鳥占は吉兆であったが（『オデュッセイアー』第24歌 309～311）

このオデュッセウスのラーエルテースに対する嘘はその必然性を理解しがたい。エウマイオスやペーネロペイアに対する嘘は、求婚者誅殺を間近にひかえ、安全を期して身分を偽る必要があると考えたのだろうと理解できる。しかし父ラーエルテースに対し、求婚者誅殺を果たした今、身分を偽り、オデュッセウスに五年前にあって別れた、などと作り話をする必要がどこに

あろう。いたずらに老いたる父を悲観させるのみではないか。

案の定ラーエルテースはまんまと騙される。そして、「彼の出發時の鳥占は吉兆であったが」とされてはいるものの、「今年は五年目になります」そして「不運なる人よ *ὄλιγοποιός*」であるのに息子の運命を絶望したのであろう、悲嘆のあまり頭に灰をかぶり呻吟する。

もつともオデュッセウスはこの直後、

彼の心は動かされ、愛する父を見てはや彼の鼻の奥を激しい力が突き、彼に抱きついて接吻して言った。「この私とその男自身です、父よ、あなたがお尋ねの。二十年目にして故郷に帰ってきたのです。」（『オデュッセイアー』第24歌 318～322）

と、まつとうな感情にとられ真実を吐露する。ではすぐ前の作り話は何故だったのか。そんな回り道はせずにすぐに真実を吐露すればよいではないかと言いたくなる。しかしここは合理的説明を求めない方がよさそうだ。むしろここは、非合理なまでの嘘好きオデュッセウスの姿を敢えて描いていると考えたい。^{【註3】}

以上三つのパラドックス、「自分の名はダレモオラス」「自分はクレイター人である」「自分に会った」はいずれも「認知」の

テーマに結びつく。そしてそれも他人からの認知に留まらず自分による認知、「自分は何者なのか」を問う間でもあるようだ。

F. アガ멤ノーンの奇妙な嘘

アガ멤ノーンの一つ一見奇妙な嘘がある。それは本稿で最初に取り上げたゼウスの彼に対する偽りの夢を受けたものだった(A1a)。

ゼウスの偽りの夢を信じたアガ멤ノーンは、今こそトロイアを陥れることが出来ると思い総攻撃を企図する。しかし一計を案じ、アカイアの軍勢を前に、戦闘へ駆り立てるのではなく、逆に帰還を提案する。その心をアガ멤ノーンは長老達に事前にごう明かしている。

さあ何とかしてアカイアの息子達を武装させよう。先ず私が言葉で試そう、それが決まりなのだから、糧多き船で逃げるよう命じよう、そなた達はてんでに言葉で引き留めてくれ(『イーリアス』第2歌72〜75)

そしてアカイアの軍勢の前でこう呼びかける。

まことに大いなるゼウスの九年が過ぎた、船の木組みは腐り、綱は緩んだ。我々の妻や子供達は家で待っている。我々

のそのためにここへ来た仕事は果たされないうまだ。さあ私が言う通りに皆従ってくれ。船で愛する故郷に逃げようもはや道広きトロイアを攻め落とすことはできないのだから。(『イーリアス』第2歌134〜141)

アカイアの兵士達はこれを聞いて望郷の念に駆られ雪崩を打って船へ向かわんとする。しかしあわやというところで、オデュッセウスの働き、そしてネストールの睿めによつて引き留められる。

このアガ멤ノーンの嘘・芝居は奇妙である。「先ず私が言葉で試そう」とあり、これは自軍の兵士達の志気を試すという意味と思われるが、そのことにどれだけの必要性があるのか。総大将なのだから、そんな回りくどいことはせずに、号令をかけるにはいいのではないか、との疑問が湧く。

この疑問について論じたものに松平千秋の論考がある。「註」以下この松平説に耳を傾けてみると大意以下のようになっている。

即ち、アガ멤ノーンは兵士達に厭戦気分が漂っているのを感じている。命令一下、皆が従う状況にはない。何らかの術策(試し)を用いて志気を昂揚せしめねばならない。その術策として、先手を打って自ら皆の気分と同調するそぶりを見せ、長老達に(撤退を主張するアガ멤ノーン自身をか、それを聞いて浮足立つであろう軍勢をか)諫めさせ・引き留めさせ、その

気分を封じようとしたのである、と。

おそらくそうであろう。総司令官がこんな重要局面でそんな芝居をするかとの疑問は残るが、逆に言えば嘘がホメーロス世界でそれだけ重要な位置を占めていたことの証左でもあろう。これは、相手（この場合は一般兵士）の心理を衝いた一種の説得術だ。後で取り上げるアガ멤ノーンによるディオオメデーヌに対する督励の嘘（H—b）に近いものがある。

ところで、この挿話の場面では上記に関連しもう一つ奇妙な点がある。それは兵士達を前にしたアガ멤ノーンの言葉の中にある。

大いなるゼウスは私を重い迷妄に陥れられた、酷い方だ。彼の神は、前には私に構えよきトロイアを攻略して帰還することを約束し承諾したのだが、今や悪しき欺瞞を企み、私に多くの兵士達を失った揚げ句不名誉にアルゴスに戻ることを命じられるのだ。（『イーリアス』第2歌111～115）

引用のはじめの方に出てくる「迷妄 *ἀτη*」は、攻略可能と信じて行動し結局は敗走するという一連の経過を指していると思われる。では後半部の「悪しき欺瞞 *kakḗn dōrān*」は何を指しているか。

普通に解釈すれば迷妄の指す一連の経過の内、特に敗走の部分を意味すると考えられる。この敗走は一旦勝利を信じさせら

れた上での敗走であり欺きの結果にはかならないからだ。しかし一方、下されたばかりの敗走の命令自体を意味するとれないだろうか。「前には *gōv tē*」に對比して「今や *hūv &*」とあることからするとそうとりたくなる。

しかし後者だとすると奇妙である。というのも敗走を呼びかける演説の中でその敗走命令を欺きであるとしていることになるのだから。

そこでアガ멤ノーンの演説全体を改めてよく見直してみると、そこには他にもちぐはぐな点があることに気づく。^{註51}

彼の神（ゼウス）は多くの町の頂を滅ぼした、これからも滅ぼすであろう、彼の神の力は最強である故。後世の人に知られることは恥ずべきことだ、これほどの強力で多くのアカイアの軍勢が少数の者に対して無駄に成果無き戦闘を戦い、終わりが見えぬとは。（『イーリアス』第2歌117～122）

ゼウスは多くの町を滅ぼす、しかも我軍は数で相手を圧倒している、云々。これらの言辭は演説の最後の結論

愛する故郷に船と共に逃げよう、もう道広きトロイアを攻略することは叶わないのだから（『イーリアス』第2歌140

～141）

にすんなりと結びつくものではない、むしろ逆行する言辞だ。無論、演説の中にある「しかしゼウスはそのように(我軍の敗退を)望まれる」、「しかし相手に援軍が多い」等の言辞によって曲折の上でかろうじて結びつくのではあるが。

アガメムノーンは何故このような回りくどい言い方をしたのか。それは無意識にか意識してか、演説を聴く兵士達に撤退反対の気持ちが起こることを期待してのことだろう。

上記の「悪しき欺瞞」もそのような言辞の一環ではなからうか。一芝居打っていてはからずも本心が出たというべきか、あるいはこれらの言辞も(暗に望郷の念を呼び起こすべく)サブリミナル効果を狙った芝居であったのか。後者であるとすると、これも巧みに織り込まれた一種の嘘であろう。

G・意図的嘘と意図しない嘘

ホメロスにおいて嘘を表す代表的語彙は *ψευδος* およびその関連語である。嘘といえは多くは意図したものでらうが、*ψευδος* (およびその関連語)が使われた場合の中には意図しない嘘を意味することがある。

G-a ネストールの嘘(1)

ネストールは遠くからの馬の足音を聞きつけて言う。

おお愛するアルゴスの指揮官達、首領達よ。私は嘘を言う *ψευδομαι* のだろうか、それとも真を言うのだろうか。心が私に(言えと)促すのだ。脚速き馬の音が耳を打っている。全くのこと、オデュッセウスと勇猛のディオメーデースが、これほど早くトロイアの陣から単蹄の馬を追って来たのならよいのだが。(『イーリアス』第10歌533〜537)

ここでネストールが意図して嘘をつく理由はない。この嘘は意図しない嘘、結果としての嘘、誤りだろう。

G-b ネストールの嘘(2)

もう一つネストールにかかわる例を挙げよう。アガメムノーンがネストールの諫言(そなたはアキレウスを侮辱した、その償いをすべきであるとの諫言)に対して返した言葉にある。

おおご老体よ、私の迷妄を数え上げられたのは *ψευδος* ではない。私は血迷ったのだ、そのことを私自身否定しない。ゼウスが愛される男は数多の軍勢に匹敵する、今彼を尊ばれアカイアの軍勢を打ち拉がれたように。(『イーリアス』第9歌115〜119)

この *ψευδος* はどうかだろうか。ここでもアガメムノーンがネストールに「意図した嘘」を想定する理由はない。もつとも

「*ψευδος*ではない」と否定した文脈ではあるのだが、それでも否定するということはその可能性のつけから排除しているわけではないことになる。やはりそれはなからう。続く言葉からもこの「*ψευδος*ではない」は「誤りではない」の意ととりたい。

G-c ゼウスの嘘

もう一つ、次に挙げるヘーレーのゼウスに対する「嘘でしょう *ψευδομαι*」はどうだろうか。ゼウスは、自らの血統で今日生まれる者を王にすると言ったことがあった（それはヘーラクレスを念頭に置いてのことだった）。するとヘーレーは言う。

「嘘でしょう、その言葉を成就なさらないでしょう。さあ、オリュンポスの君よ、ここで確かな誓いを誓って下さい、人間共の内あなたの血統で今日女の足下に落ちる者が周りの全ての者を統べると。」こう（ヘーレーが）言うときゼウスは奸策に気づかず大いなる誓いを誓った、大変な迷妄に陥ったのだ。（『イーリアス』第19歌107～111）

案の定、ヘーレーはヘーラクレスの誕生を遅らせ他の赤ん坊を産ませる。ゼウスは後で知って激怒することになる。

この「嘘でしょう」は、「そんなことは言っても結局実現しないでしょう（意図しない、結果としての嘘）」と言っているのか、それとも「そんなことは言っているものの実は本気で思っ

ていないのでしょうか（意図的嘘）」と言っているのか。

至高のゼウスには基本的に不可能事はないはずであることを考えれば後者（意図的嘘）かと思える。しかしここでヘーレーはゼウスにそれを実行させようと企んでいるのだから、「あなたには出来っこないでしょう」と挑発している、即ちヘーレー発言の趣旨は前者（意図しない、結果としての嘘）だと解釈したいところだ。

H・意図的なしかし欺きを目的としない嘘

このように嘘には意図しない嘘もあるのだが、それは少数であり多くは意図的嘘である。嘘の王道（？）はやはり意図した嘘、それも相手を欺こうとする嘘にある。しかし意図的嘘の中には稀に相手を欺くことを目的としない嘘がある。

H-a 皮肉の嘘

H-a-1 「黄金の留め金で……」

例えば『イーリアス』第五歌でアテーネーはゼウスにこう言う。アプロディーテーを皮肉つてのことだ。

きつとまたキュプリス（アプロディーテー）は酷く愛しているトロイア人を追うようにとアカイアの女を唆したに違ありません。よき衣のアカイアの女の誰かを愛撫してい

る内に黄金の留め金で柔らかな手を切ったのでしよう。

（『イーリアス』第5歌422～425）

この時アプロディーテーは、戦場でディオメデーデースに槍で突かれ負傷させられたのだった。それをアテーネーは「よき衣のアカイアの女の誰かを愛撫している内に黄金の留め金で」などと故意にありもしないことを言っている。しかしそれはゼウスを欺こうとしてのことではない、ただアプロディーテーを皮肉るためのものだ。実際直後のゼウスは、

そのように言うと、人間共と神々との父は微笑んだ。

（『イーリアス』第4歌426）

と、欺かれるどころか即座にその嘘の持つ皮肉を理解し一緒に楽しんでる。

H— a— 2 「座って見て楽しんでる」

そのゼウスも同種の嘘をヘーレーとアテーネー二女神に対して言っている。二女神の輩戻するメネラーオスがパリスとの一騎打ちで相手を圧倒し討ち取らんとし、それがアプロディーテーによって邪魔された時だった。

メネラーオスには輩戻する二女神がいる、アルゲイエイ・

ヘーレーとアラルコメネーイス・アテーネーとだ。しかしその二女神は遠くに座って見て楽しんでる。（『イーリアス』第4歌7～10）

ヘーレーもアテーネーも「座って見て楽しんでる」どころではない、怒り心頭で今にでも飛んでいきたいところなのだ。ゼウスはそれを百も承知、敢えて逆を言うことで面前のヘーレーとアテーネーを挑発し皮肉っているわけだ。故意の嘘はしばしば皮肉の手段となる。

H— b 督励の嘘

この例はどうか。アガ멤ノンが各部隊を督励して回っているときにディオメデーデース率いる一隊のところに来る。そこでアガ멤ノンはディオメデーデースに対し「そなたは戦において父に大いに劣る」と言う。それに対しディオメデーデースの僚友ステネロスが反発して言う。

彼に誉れ高きカバネーオスの子（ステネロス）が応えた。「アトレウスの子（アガ멤ノン）よ、よく知っているながら嘘を言う *ψεύδομαι* のはよしなさい、憚りながら我々は父親よりはるかに優っていると誇っている。」（『イーリアス』

第4歌403～405）

これは意図した嘘だろうか意図しない嘘だろうか。

まず、発言者アガメムノーン自身としては、「そなたは戦において父に大いに劣る」との発言が「意図した嘘」であったことはほぼ明らかだ。ディオメーデースは指折りの戦士であることは自他共に認めるところだったからだ。^{〔註5〕}

無論「意図した嘘」とはいっても騙すことを目的としたものではなく督励の手段としてだ。アガメムノーンは敢えて若手筆頭格のディオメーデースを標的に挑発することで全体の志気昂揚をはかったのであろう。今でもスポーツチームの監督が使う指導法の一つである。

では、そこで反発したステネロスは *weido* をどちらの意味で使ったのだろうか。それは、ステネロスがアガメムノーンの発言の趣旨をどう取っていたかにかかわってくる。

もしステネロスが、それが督励の手段だと思わずアガメムノーンの本気の発言であると考えていたのなら、この *weido* は認識不足から「誤る」意図せず嘘をつく」と言っていることになる。

もしステネロスが、それを督励の手段であり本気の発言でないとして理解していたとしたら、この *weido* は「意図して嘘をつく」となる。即ち、事実を知っているのに（督励のためかどうか知らぬが）そんな嘘をつくことは無用と反発していることになる。

「よく知っていないが」とあるところを見ると後者に分がある。

もっとも、この「知っている」内容がディオメーデースの武勇の事実を指すのでなく一般的な「ものを心得ている」意であるならば、理屈上前者の可能性は残る。とはいえディオメーデースの武勇は周知の事実であったから、それを総大将アガメムノーンが「知っていない」とのステネロスの判断はあり得ない。やはり後者であらう。従ってステネロスもこの *weido* は「意図して督励ために嘘をつく」の意で使っていると考えられる。

H1c 配慮の嘘

H1c1 ヘレネー||テイレマコス

先にネストールの言、

私は嘘を言う *weoioiai* のだろうか、それとも真を言うの
だろうか。〔イーリアス〕第10歌 534

を挙げた（G1a参照）。その詩行がそのまま「オデュッセイア1」でヘレネーの言葉の中に出てくる。テイレマコスを客人として迎えた席で、彼がオデュッセウスにあまりにも似ていることに気づき、（テイレマコスが名乗る前であったので）それを口に出すか否か躊躇する言葉だ。

私は嘘を言う *weoioiai* のでしょうか、それとも真を言う
のでしょうか。心が私に（言うよう）に促します。という

のも誰かこれほど似た方を見たことがないからです、男の人でも女の人でも。拝見するに驚きに打たれます。それほどこの方は心広いオデュッセウスの息子様に似ていらつしやる。〔オデュッセイアー』第4歌140〜143〕

上記ネストールの言の場合と同様「誤りかまことか」とすることも出来る。しかしこの箇所については別の解釈がありそちらをとりたい。

即ち、*Neotouai*を「気づいたことを言わずにおく、知らぬふりをする」の意に解し、客人に対する礼儀からのこととするのだ。するとそれは、欺きというよりは、悪意のない、それどころか相手（テレマコス）を慮った嘘であることになる（客人に本人が名乗る前から誰々ですかと問うことは憚られたのであろう）。高津春繁は、ネストールの言の方は「誤り」とし、ヘレネーの言の方は「知らぬふりをする」と訳し分けている。〔註2〕この訳し分けは興味深く、また大いに理がある。というのも、前者ネストールが智者として「真偽」を重要視し、後者ヘレネーが女主人として「言うべきことか否かの」礼儀」に気を配ることはそれぞれ極めて相応しいことであるからだ。それで同一詩行でありながら別様に訳したものだ。それは、詩人自身が*Neotouai*の語義の広がり範囲で同一詩行を人物と状況に応じて意味を使い分けたのだと考えることになる。これもまた興味深い。

H1c12 オデュッセウスIIナウシカアー

また、こういう例もある。

オデュッセウスの漂流譚中、パイエーケスの国でのナウシカアーをめぐる挿話は一篇の叙情詩編の趣があるのだが、その中にこういうくだりがある。

アルキノオス王にどのようにしてここにたどり着いたかを尋ねられて、オデュッセウスは答える。船が難破し海辺に泳ぎ着き、王の娘ナウシカアーと出会った、彼女は丁重に接し食事や衣服を与えてくれた、と。すると王は言う、娘が自分で屋敷までお連れしなかったのは不届きである、と。それに対してオデュッセウスはこう言う。

殿様、決して申し分なき娘御を咎めないようになさって下さい。（娘御は）私に侍女達と共に随いてくるようにと勧められたのです。しかし私はそれをご覧になってあなた様がお機嫌を損ねはしなかと恐れ、憚りそれを望まなかったのです。地上の人間はとかく悪く考えがちなものですから。（『オデュッセイアー』第7歌303〜307）

しかし実際は、ナウシカアーは町中に入るにあたって（人目を憚って）オデュッセウスに離れて遅れてくるようにと指示したのであり、オデュッセウスの方から離れていくことを望んだのではなかった。ナウシカアーを庇うための咄嗟の嘘だ。王の

娘に対する行き過ぎた怒りを静めんとの配慮が働いた嘘である。この叙情的歌章においてはオデュッセウスの嘘も濃やかな色彩を帯びている。

1. 誓言と嘘偽り

ホメーロスの両詩篇には誓いをする場面が何回も出てくる。本来誓言は嘘を排除するはずのものだ。では実際に嘘の誓言は全くないのだろうか。さすがに誓言では嘘をつかないのだろうか。

1-a アキレウスのカルカースに対する誓い

『イーリアス』第一歌冒頭近くに早速誓いの場面がある。アキレウスが鳥占師カルカースの要請に応じて命を守ることを誓う。

勇を鼓してそなたが見るところの神意を語ってくれ。ゼウスの愛でるアポローン、そなたがそれに祈ってダナオイ人に神意を示すところのアポローンに誓って、俺が生きて地上で目を見開いている限りは、ダナオイの誰であろうと空ろな船の端でそなたの上に重い手を掛けることはない、たとえそれがアカイアの中で今はるかに優っていると誇っているアガ멤ノンであろうと。 (『イーリアス』第一歌 85～91)

この誓いを聞いてカルカースは安心しアポローン神の怒り(の理由)を明かす。誓いが嘘ではあり得ないと了解が成立していたようだ。

1-b 女神ヘーレーのゼウスに対する誓い

女神ヘーレーも誓う。ゼウスを眠らせ、その間にポセイダーオンによるアカイア方への加勢を許したことで、ゼウスからこっぴどく叱責された時だった。

今や照覧あれ、大地と上方に広き天空と、幸う神々にとつてもっとも恐ろしき大なる証人であるスチュクス河の水と、あなたの尊い頭と、そしてその名にかけて私が決して徒に誓うことはない私たち自身の床(も照覧あれ)。私の指図で大地を揺るがすポセイダーオンがトロイア勢とヘクトールを苦しめたのではありません、彼自身の心が促し命じたものです。アカイア勢が船端で苦戦しているのを彼が見て哀れんのでことです。しかし私はあなたのために彼を説得しましょう、黒雲のあなたが導くところへ行くようにと。(『イーリアス』第15歌36～46)

この時もゼウスは誓言に満足しすぐに怒りを解く。ヘーレーの誓言が嘘であるはずがないとの前提に立っている。^[註8]

—c ゼウスのヘーレーに対する誓い

それどころかゼウス自身でさえ誓言は破り得ないものだったようだ。ヘーレーの詐術に載せられての誓言は先に挙げた(G—c)。それはこうだった。

「嘘でしょう、その言葉を成就なさらないでしょう。さあ、オリュンポスの君よ、ここで確かな誓いを誓って下さい、人間共の内あなたの血統で今日女の足下に落ちる者が周りの全ての者を統べると。」こう(ヘーレーが)言うときゼウスは奸策に気づかず大いなる誓いを誓った、大変な迷妄に陥ったものだ。(『イーリアス』第19歌107—113)

その時ヘーレーは、ゼウスの念頭にあつたヘーラクレスの誕生を遅らせ、他の赤ん坊を先に産ませる。ゼウスは後で知って激怒するが誓言を破ることは考えない。

—d 妖女キルケーのオデュッセウスに対する誓い

『オデュッセイアー』からも例を挙げよう。オデュッセウスの部下達が妖女キルケーによって豚にさせられる。それを救いに行ったオデュッセウスも豚にされようとするが、彼はキルケーを取り押さえる。相手は彼を懐柔せんとしてか臥所に誘う。そこでオデュッセウスは言う。

「私はあなたの臥所に上ることは望まない、女神よ、あなたが大いなる誓いを誓うまでは、これ以上悪しき禍を企まない」と。このように言うとき、彼の女神は私の要求通り誓いました。誓って誓言をなし終えたときに、私は美しい臥

所が上がったのでした。(『オデュッセイアー』第10歌342—347)

この時も一旦誓言した以上それは破られないものとオデュッセウスは信じている。

—e 破られる誓言

それではホメーロスの詩篇中で誓言が破られる場面はまったくないのだろうか。

最初から破るつもりでの、騙すための誓いという意味では見いだし得ない。さすがにそれは憚られたのであろう。しかし結果として守られなかった誓いの例は両詩篇に一つずつある。

—e—1 両軍の誓い

『イーリアス』では重要な場面でそれがある。両軍が当事者であるメネラーオスとパリスの一騎打ちによって戦いの決着をつけようと合意し誓約する。しかしその誓約が守られなかったのだ。

ただ、この誓約不履行については偽誓と言い切れるか否か若

干の議論がありうる。

まず、トロイア方が明確な誓言をしていないのではないのかという点がある。アガ멤ノーンの方は次のように誓う。

父たるゼウスよ、イーデーから統べるいと誉れ高き、偉大なる(ゼウスよ)、全てを照覧し全てを聞き給う太陽よ、河と大地よ、そして地下にあつて死者達の誰であれ偽誓せし者を罰し給う神達よ、あなた方は証人となり、信実の誓いを守り給え。もしメネラーオスをアレクサンドロス(パリス)が殺すなら、彼がヘレネーと財宝全てをとるがいい、我々は海わたる船で帰ろう。またもしアレクサンドロスをメネラーオスが殺すなら、トロイア人達はヘレネーと財宝全てを返し、後世に伝わるようにしかるべく我々の名譽を回復するのだ。(『イーリアス』第3歌276～287)

ゼウスと太陽と河と大地とそして冥王までも持ち出して最大級の厳かな誓いだ。一方トロイア方は誓ったとは言われていない。しかしその場には

お立ち下さい、ラーオメドーンの子(プリアモス)よ、馬を馴らすトロイア人と青銅の鎧のアカイア人の大將方が呼んでおられる、信実の誓いを結ぶために原に降り立つように。(『イーリアス』第3歌250～252)

との要請に応じたプリアモス王がおり、その誓いを聞き届け、異を唱えていない以上、やはりトロイア方も誓ったと同然と考えるべきだろう。

もう一つの議論はメネラーオスがパリスに対して完全に勝利したのか否かの点だ。確かにメネラーオスは相手を圧倒し、

さあそこで(メネラーオスはパリスの)馬毛飾りの兜を掴み、向きを変えてよき脛当てのアカイア勢の方に引いていった。刺繍された紐が彼を柔らかき首の下ところで締め上げた。それは彼の顎の下で四つ角の兜を留めていた留め紐だった。そして引きずっていつて不朽の誉れを勝ち得るところだった。(『イーリアス』第3歌369～373)

と勝利目前だった。しかしそこで女神アプロディーテーが介入しパリスの身体を救い出したのだった。自らの意思でない戦線離脱である。これは勝敗が決したと言えるかどうか微妙ではある。それでは両軍はこの点をどう見ていたのか。

アガ멤ノーンは言う。

アルゴス人達よ、勇ましき力を忘れるな。父神ゼウスは嘘つき共の味方をなさることはないのだから。奴等は先に誓いを破ったのだ。禿鷹共が奴ら自身の柔らかき肌を食らうだろう。我々の方は愛する妻といとけない子供とを船で連

れ帰るであろう、町を攻め落としてから。（『イーリアス』第4歌234～239）

一方トロイア方の将アンテノールもこう言う。

トロイア人達とダルダノスの人達、そして加勢の人達よ、聞いてくれ、心が胸の中で私に命ずることを言うから。さあアルゴスのヘレネーと彼女と共に財宝をアトレウスの子に持つて行くよう引き渡そうではないか。今我々は信実の誓いを破つて戦っている。その故、こうしなければ我々にとって有利な結果を期待することはできないのだ。（『イーリアス』第7歌348～353）

これらを見ると両軍とも誓いを破つたとの認識であつたと考へるべきであろう。そうするとこれは『イーリアス』における偽誓の例である。そして先のアガ멤ノーンの「父神ゼウスは嘘つき共の味方をなさることはない」の言葉は、偽誓はゼウスによつて報いを受けるはずだとの認識を示している。

1—2 オデュッセウスの部下達の誓い

『オデュッセイアー』においては、漂流中オデュッセウスの部下達が誓いを反故にする場面がある。

一行が太陽神の飼う牛や羊のいる島のそばに來たとき、部下

達はその島に降り立つことを願う。オデュッセウスは不本意ながら求めに応じ、しかし部下達には島の牛や羊に手を出さないと誓わせたのだつた。というのも、ひとたび太陽神の牛や羊を殺めたならば部下達の帰郷は叶わぬことになるとの予言を聞いていたからだつた。

だがさあ皆、ここで誓つてくれ、確かな誓いを、たとえ牛の群や羊の群の一頭を見つけても、誰も悪しき愚かさから牛や羊を殺したりせぬと。（『オデュッセイアー』第12歌298～301）

こうして「確かな誓い」を誓わせ、誓つたからにはとオデュッセウスも油断したのであるう、部下達がひもじさに負け、オデュッセウスの目を盗んで牛を食べることを見逃すことになる。結果は予言どおりで、誓いを破つた部下達は直後の航海で全員死ぬ運命になるのであるが。

『オデュッセイアー』には他にも、偽りの誓いとおぼしき例がないわけではない。それはオデュッセウスの豚飼エウマイオスに対するものだ。帰郷し乞食に身を賣したオデュッセウスはまず豚飼の下に身を寄せる。そこで乞食が誓いを立てて、オデュッセウスが帰郷するであろうと確言する。

されば神々の中で先ずゼウスも照覧あれ、主客の食卓も、私がつどり着いた非の打ち所なきオデュッセウスの妒も。これら全てが私の言うとおりに実現されるであろう。この同じ年のうちにオデュッセウスがここに来る。前の月が去つて新しい月が始まるときに家に帰つてくるだろう、そしてここでその奥方と立派な子をないがしろにしている者皆を懲罰されるであろう。〔オデュッセイア』第14歌158〜164）

ほぼ同様に、乞食による誓いを立てての確言が後にペーネロペイアに対してもなされている。これらは偽りの誓いと呼ぶべきだろうか。その必要はあるまい。確かに今ここに当人がいることを偽ってはいないのである。オデュッセウス帰還という誓いの核心たる事実には偽りはない。オデュッセウスも偽りの誓いでないと思うからこそ心おきなく誓うのであろう。

そうすると、ホメーロス詩篇中、数ある誓いの中で偽誓は、上記『イーリアス』における両軍の誓いの例と『オデュッセイア』におけるオデュッセウスの部下の誓いの二つのみだ。しかしそれはホメーロス世界で嘘偽りが少ないことを意味しない。そもそも誓いとは嘘偽りをしないことを誓うものだ。むしろ、そういう誓いをしばしば必要とする程嘘が多かったと考えるべきだ。誓いのなされなかつた時にはどれほどそれが跋扈していたか、

本稿のこれまでの例、これからの例でも明らかだろう。

J. 予兆・予言と嘘偽り

両詩篇には予言の場面が何回か出てくる。予兆の神意を説き明かすのが予言だ。予言をなす者は *μυρτις* (予言者) と *τεπεύς* (祭司) と *ὄνειρονόμος* (夢占師) と。また *οἰωνοτόμος* (鳥占師) と呼ばれる。

予兆・予言は常に真なのだろうか。それとも、予言者が意図して嘘の予言した場合はあるだろうか。また登場人物は予言を信じていたのだろうか。

J-1 a アガ멤ノーンのいいがかり

『イーリアス』の冒頭近く、アガ멤ノーンはこう言つて鳥占師カルカースを詰つている。

悪しき予言者よ、お前はいまだかつて善きことを言つたことはなかつた、常に悪しきことを予言するのがお前には氣に入るのだ。よき言葉と言つたこともなかつたし成し遂げたこともない。〔イーリアス』第1歌106〜108）

まるでカルカースがこれまで意図的に嘘偽りの予言をして来たかのような口ぶりだ。しかしこれは事実ではあるまい。これ

は（自分の分け前の女を返すべしとの）不都合なことを言われたアガムノーンのいわばいいがかりだ。アガムノーン自身も怒りにまかせてそう言ったままで、心からそう思っているのではなからう。

J—b テオクリュメノスの予言

『オデュッセイアー』では、予言者テオクリュメノスの予言を求婚者達は無視する。

テオクリュメノスは予言する。

ああ哀れな者達よ、どんな禍をお前たちは蒙ることか。お前たちの頭と顔と下肢は夜に覆われている。うめき声がわき上がり頬は涙で濡れている、壁と美しい梁は血に塗れている。控えの間も中庭も闇の下の幽冥界に向かう亡霊で溢れている。太陽は天空から滅し悪しき霧が立ちこめている。

（『オデュッセイアー』第20歌351～357）

総毛立つような生々しい描写だ。これは求婚者達に間近に迫った破滅を予言したものだ。しかしこの予言を求婚者達は嘲笑う。その中の一人は言う。

よそから来たばかりの客人は血迷っているぞ、若者共よ、そいつをすぐに外に追い出せ、集会場へでも。こちらは夜

だと言っておいでのようだから。（『オデュッセイアー』第20歌360～362）

嘲笑われた予言はしかし現実のものとなるのだった。

J—c プーリュダマースの忠告

プーリュダマースはヘクトールに鳥占師がするであろう予言に従うよう忠告する。すなわち濠を越えて攻め込むことは控えるように勧めたのだった。それに対しヘクトールは言う。

お前は翼広き鳥に従うようにと命ずる。そんなものを俺は顧みないし気にしない、たとえ右に曙や太陽の方へ行こうと、あるいは左に霧深き闇の方へ行こうと。（『イーリアス』第12歌239～240）

ここでヘクトールは、占いが嘘だとまで言っているわけではないが、鳥占を気にしないと云っている。どうもヘクトールは鳥占を信じていないようだ。

J—d プリアモスと鳥占

ヘクトールの父プリアモスにもこのような言がある。ゼウスの使いの女神イーリスから息子ヘクトールの遺体をを請い受けに行くようにと告げられた時である。

もし地上の誰か他の者、生け贄を司る予言者や祭司が命ずるのなら、我々は嘘だと思ひむしろ避けるだろう。今は神の声を聞きその顔を目の当たりに見たのだ。(『イーリアス』24―220―3)

予言者が嘘の予言をすることがある、と言っている。そう言っておきながらしばらく後には、吉兆の鳥を遣わすようゼウスに祈る。そしてその鳥が現れる。

彼等(ブリアモスとその后ヘカペー)の右方に(鷲が)町を横切つて現れた、彼等はそれを見て喜び心は暖められた。

(『イーリアス』第24歌319―321)

先の「我々は嘘だと思ひむしろ避けるだろう」の言と一見矛盾しているように見える。ただ、こうとすることが可能だ。すなわち、先の古い師による前兆解釈には誤りがあり得るが、前兆自体に嘘偽りはない、そうブリアモスは考えているのではなからうか。

以上は(最後のブリアモスの鳥の場合を除いて)前兆や予言やに対して多少なりとも疑いがかけられた例だ。しかしこれらは稀な例であつて多くの場合無条件で予言は信じられた。その例を『イーリアス』と『オデュッセイア』とから一つずつ挙げ

ておこう。

Jie カルカースの予言

『イーリアス』第二歌で、オデュッセウスは帰還しようとする足だったアカイアの軍勢を引き留め諫める。その中でカルカースのアカリスの浜でなした予言を皆に想起させる。浜の鈴懸の木の下で大蛇が九匹の雀を食い忽然と姿を消した。それを見てアカイア勢が呆然としてしていると、カルカースが立つて予言したのだった。

カルカースはそしてすぐさま神意を説いてこう言つた。「髪長きアカイア人達よ、どうして沈黙に陥つてゐるのだ。我々に知謀のゼウスはこの徴を顕されたのだ。すなわち後に遅れて成就するがその名はけして滅びることがないということとを。丁度、この蛇が雀の雛とその親とを、八羽の雛と九羽目にその雛を産んだ母鳥とを食い尽くした、その如くに我々はここでそれだけの年数を戦い、十年目に広き道の町を攻め落とすであらう」と。(『イーリアス』第2歌322―329)

実はこのカルカースの予言の話をオデュッセウスは

友よ耐えるのだ、そしてしばし留まれ、カルカースが真を

予言したのか、それともそうでないのかを見極めるために。
（『イーリアス』第2歌 299～300）

と言つて始めている。「真を予言したのか、それともそうでないのか」と言っているから理屈上は半信半疑ともとれる。が、これは説得のためのオデュッセウス一流のレトリックであろう。予言をオデュッセウス始め皆が信じていたことは、このオデュッセウスの発言の直後

そのように言うとアルゴス人達は高らかに叫び、神の如き
オデュッセウスの言葉を称えるアカイア勢の喚声によつて
周りの船がすさまじく反響した。（『イーリアス』第2歌
333～335）

とあることから見てもほぼ明らかだ。

J f ゼウスの徴

求婚者討伐のための一戦を明日にひかえたオデュッセウスが、
ゼウスに念願成就の徴を示すよう祈る。

父神ゼウスよ、あなた方神々の御心により、酷い艱難の後
に陸上と海上を私の故郷の地に導きたもうたのであれば、
家の内で起きている人の誰かに徴の言葉を言わしめて下さ

い、そして外にはゼウスの他の徴を示して下さい。（『オ
デュッセイアー』第20歌 98～101）

すると「外」にはゼウスの雷鳴がはためき、「内」では白引き
女が言葉を発する。しかもその言葉は「求婚者達にとつて今日
が最後の食事となりますように」というものだった。

これらを耳にしたオデュッセウスはそこに顕れた徴をすぐさ
ま信じる。

（女は）そのように言った。オデュッセウスは言葉の予兆
とゼウスの雷鳴に喜んだ。悪人共を討伐できると思ったの
だ。（『オデュッセイアー』第20歌 120～121）

神の示す徴＝前兆への信頼である。

以上ホメーロスの世界で予兆・予言は、時にその真偽に疑い
が呈されることがあったものの、ほとんどの場合真であると信
じられていたと見ることが出来る。

K. 夢と嘘偽り

ペーネロペイアが言う。

お客様、夢というものは捉えがたく訳のわからないものです。全てがその人間に実現するわけではありません。というのも儂い夢には二つの門があるからです。一つは角で作られ、もう一つは象牙です。切られた象牙 ἐλεφαντος を通つてくる夢はそら言で実現しない言葉をもたらします。一方、磨かれた角 κεράων を通つて出てくる夢はそれを人が見るときそのまま事実となるのです。〔オデュッセイアー〕第19歌560〜567〕

ἐλεφαντος (象牙) と ἐλεφαίνουσι (欺く)、 κεράων (角) と κραινώ (実現する) とを結びつけた古代ギリシア人得意の民間語源説に拠つたものだ。語感からいっても前者「elephantos」が浮遊する感、後者「keráon」が確固たる感がするのは思いなしだらうか。いずれにせよ正夢もあるが逆夢もある。

本稿冒頭(Aーa)に引用したアガ멤ノーンが見た夢は、ゼウスがアガ멤ノーンに送つた嘘の夢だった。この夢についてアガ멤ノーンが語るのを聞いてネストールはこう言つていた。

アルゴスの指揮官達、大将達よ、もしアカイアの誰か他の者がこの夢の話をしたのなら、嘘と思ひむしろ避けることであるう。今はアカイア陣中一番を誇る人が見たのだ。さあアカイアの子達を武装させようではないか。〔イーリ

アス』第2歌79〜83)

ネストールはゼウスの送つた嘘の夢を「アカイア陣中一番を誇る人が見たのだから」との理由で信じている。知恵並びなきネストールではあるが、ここでは誤っている。夢に対する認識は先のペーネロペイアの方が深いようだ。

L. ペーネロペイアの詐術

ペーネロペイアは求婚者達を機織りによつて三年にわたつて欺き続ける。結婚を迫る求婚者達に対し、舅ラーエルテースの葬儀の衣を織り上げるまで待つてほしいと言つて。

彼等(求婚者達)は結婚を迫りました。私は計略をめぐらしました。先ず私の心に神が大きな織機を置いて部屋で幅広の布を織る考えを吹き込みました。……そこで昼間は大きな機を織り、夜は松明を傍においてそれを解いたのです。そのようにして三年間氣づかれることなくアカイア人に信じさせていました。〔オデュッセイアー』第19歌137〜151)

女性にとつて機織りはことのほか重要な仕事だった。ペーネロペイアはその機織りによつて嘘をついている。

一方、『イーリアス』のヘレネーには、自らが引き起こした戦闘の様を機織りで織り込んでいる場面がある。使いの女神イリスが、パリスとメネラーオスとの他ならぬヘレネーをめぐっての一騎打ちがはじまると知らせに来たときだった。

彼女(ヘレネー)を(イリスは)見つけた。彼女は機を織っていた、二幅の赤紫のを。そこには馬を馴らすトロイア人と青銅の衣のアカイア人が彼女の故に軍神の掌の下で蒙つた多くの試練を織り込んでいた。〔『イーリアス』第3歌 125〜128〕

自らの運命に向き合い耐えている女の姿がある。

ヘレネーとペーネロペイア、この両者の姿にも『イーリアス』と『オデュッセイア』とそれぞれの特徴が出ている。前者のヘレネーは痛切な真実を織り込んでいた、後者のペーネロペイアの機織りは巧妙な虚偽の行動だった。ペーネロペイアはさすがトロイアの木馬の計略を考え出したオデュッセウスの妻だ。

M. オデュッセウスの嘘の中の嘘

そのオデュッセウスの木馬の計りごととは有名だ。それに比べれば些細だが、別のトロイア戦争時の嘘にまつわる挿話がある。豚飼エウマイオスに乞食(実はオデュッセウス)がその挿話を

語る。伏兵としてトロイア城下に潜んだオデュッセウス以下一隊の中に自分がいた。自分は上着を持たず寒さに耐えきれない。そこでそれをオデュッセウスに訴えると彼は一計を案じてこう言った。

(オデュッセウスは)肘に頭を支えて言葉を言った。「者共よ聞いてくれ、寝ている間に聖なる夢が私を訪れた。船々からずいぶん遠くまで我々はやって来た。誰かいないか、兵士達の長アトレウスの子アガ멤ノンに、もつと多くの加勢を船陣から送るようにと伝えに行つてくれる奴は。」〔『オデュッセイア』第14歌494〜498〕

それを聞くなりトアースという男が上着を脱ぎ捨てて船陣に向けて駆けだして行つた。自分はまんまと上着にありつけた、と。(この一節は若干言葉足らずの感なきにしてもあらずで、「夢が私を訪れた」とその後の言葉との繋がりが捉えにくいのが、夢で「自陣からこれほど離れたところにこの手勢では危険だ」との警告を受けたとの趣旨と解される。)

この挿話の中の「夢」は勿論嘘(作り事)だ。しかし考えてみればこの伏兵の挿話自体嘘(作り話)に違いない。すると嘘の中の嘘だ。そして更に考えてみれば、そもそも『オデュッセイア』は嘘(虚構)ではないか。嘘の迷宮に入っていきそうだ。

あとがきに代えて——アキレウスは嘘をついたか

『オデュッセイアー』の主人公オデュッセウスが嘘つきの名人であることは論を待たない。では、『イーリアス』の主人公アキレウスは果たして嘘をついたのか。

まえがきに挙げた『オデュッセイアー』でのアルキノオス王の言葉と好一对と思われるのが、『イーリアス』第九歌でアキレウスが和解使節団長格のオデュッセウスに向けて放った言葉だ。

というのも冥王の門と等しく俺は憎むのだ、あることを心に隠し、他のことを言うようなそんな奴は（『イーリアス』

第9歌 312～313）

これは、表向き憎きアガ멤ノーンに対する言のよう聞こえるが、実はそのアガ멤ノーンのために弁舌を揮った面前のオデュッセウスを当てこすったものではないかと思える。^{註9}そのような言を吐くアキレウスは直情径行、嘘つきの対極にある人物と考えられる。

しかし彼には一つ疑問な言動がある。アキレウスは、その和解を勧めるオデュッセウスへの反論の中でこんなことを言っている。

もはや私には神の如きヘクトールと戦う気はないのだから、明日にはゼウスと全ての神々とに犠牲を捧げ、確り荷を積み、船を海に漕ぎ出し、そなたは見るであろう、もしそれを望むなら、気に掛けるなら、明け方私の船が魚多きヘレスポントスを渡り行き、船中では男達が懸命に權をこいでいるのを。（『イーリアス』第9歌 356～361）

これを聞くと、出立はもう決まったものの如くだ。

しかし実際はその後、アキレウスは出立の気色を全く見せていない。直後の和解使節とのやり取りの中でも既に前言を翻すようなことを言っている。

ポイニークスに対してはこう言う。

彼等は復命するであろうが、そなた（ポイニークス）はここに留まって柔らかい床で寝るがいい。夜明けの時に考えよう、我々が故郷に帰還するか、それとも留まるか。

（『イーリアス』第9歌 617～619）

「帰還するか、それとも留まるか」まだ決していないと言っている。

更に大アイアースに対してはこう言う。

私は血に塗れた戦いを思わないだろう、心広きプリアモス

の子神の如きヘクトールが、アルゴス人達を殺しながらミュルミドーンの陣屋と船のところまで来て火で船を焼かないうちは、だが私の陣屋と黒き船のあたりでは、いかに戦いに逸つていようとともヘクトールは押しとどめられるであろう。(『イーリアス』第9歌650～655)

「火で船を焼かないうちは、だが」その時は立ち上がると示唆している。

では、オデュッセウスに対する「(出立する船を)そなたは見であるろう」は嘘だったのか。いや、そうではなからう。確かに首尾一貫を欠くが、それはむしろその時その時の心をありのままに吐露している結果、言葉において直情径行を地で行っている結果と見るべきだろう。

アキレウスにやはり嘘は似合わない。嘘を繞るこのアキレウスとオデュッセウスの対照、これはアキレウスの原理とオデュッセウスの原理の対照、ひいては『イーリアス』的世界と『オデュッセイアー』的世界の対照を象徴するものである。

さてそれでは、嘘をつかないアキレウス＝『イーリアス』的世界が人間世界の本来の姿であり、嘘をつくオデュッセウス＝『オデュッセイアー』的世界はその爛熟した、あるいは墮落した姿なのだろうか。ことはそう単純ではない。世界各地の神話・昔話は嘘偽りや法螺で活躍する神・英雄・人気者に事欠かない。

古代ギリシアにおいても、そもそもオデュッセウスの真の父親は(いかにも真面目なラーエルトースではなく)狡知に長けたシーシュポスであり、この父シーシュポスとこれまた狡知に長けた祖父(シーシュポスの舅)アウトリュコスとの兩人は、最初は騙し合ったが、ついにはお互いの狡知を認め合つて肝胆相照らしたとの愉快な伝説もある。人類の古い記憶には嘘つきの姿が刻印されている。

人間だけでなく、広く生物は嘘をつく。動物や昆虫、植物の世界にまで騙しや擬態の例にはことか欠かない。ホメーロスの詩篇はそのような人間の、ひいては生命の歴史に深く棹さしているのではなからうか。

ホメーロス以降、哲学はじめ諸学は真を求め努力を積み重ねて来た。しかしこの人間世界に嘘偽りの衰える兆しは一向に見えない。『オデュッセイアー』に「悪事は栄えぬ」(第8歌329)の詩句があるが、依然として「嘘は栄えている」ようだ。

註

【註一】この三十三のニンフ名の中に、*Ayewōnīs* と共に *Nhēpōnīs* の名が挙げられている。

いずれも「真正の」と言う意味だ。

しかし語の成り立ちを見ると、*Nhēpōnīs* は「否定辞

Ἠ + κταπρία 誤り」であり、*Ἀψευδής* の「否定辞 *A + ψευδής* 嘘」とは異なっている。前者は無知故か迂闊さ故かの真からの意図せざる逸脱であり、後者は基本的には（というのには後に見るように常にではないからのだが）真からの意図的な逸脱なのであろう。

【註2】 A. Hoekstra: A Commentary on Homer's *Odyssey*, vol. 2 p179

【註3】 何故敢えて非合理なまでの嘘好きオデュッセウスの姿を描いたかについて、筆者は「皮肉家？ ホメーロス」と題した小論で若干の考察をしたことがある。（明治学院大学『言語文化』34号2017.3 所収）

【註4】 松平千秋「『イーリアス』第二歌の構成」、『ホメーロスとヘロドトス』（筑摩書房、1985.9 所収）

【註5】 M.M. Willcock は「のアガ멤ノン」の演説について「帰還への徳運と引き留めの混淆である」と指摘している。（Homer: *Iliad* vol. 1 p199, Bristol classical Press, 2009）これは的を射た指摘と思われる。

【註6】 アカイア方の戦士を『イーリアス』における描写を頼りに仮に順位付けをするとしたらどうなるか。筆頭がアレウスであることは間違いない。次いで「男達の中でテラモーンのアイアースがはるかに抜きんでいた、アキレウスが怒って（戦列を退いて）いた間は」、『イーリアス』第2

歌（768〜769）といわれる大アイアースが来る。三番手以降にアガ멤ノン、オデュッセウス、そしてディオメーデースがほぼ同格で並んでいるようだ。アカイアで指折りの、しかも自らに匹敵するほどのディオメーデースをいかにその父（テューデウス）が勇者であったからといって「大いに劣る」と考えることはあるまいと思われる。

【註7】 高津春繁訳『イーリアス』筑摩書房、1969.1
『オデュッセイア』筑摩書房、1966.12

【註8】 このヘーレーの誓言は巧みだ。ポセイターオンのアカイア勢への加勢は「私（ヘーレー）の指図」によるものではなかったといっている。その限りでは嘘ではない。確かに、ヘーレーが指図する場面はなかった。しかし、ヘーレーはその加勢を見て喜び、加勢がゼウスによつて妨害されることなきようにと、ゼウスを誑かし、眠らせたのだった。そのことには触れていない。言わないことによる実質的嘘というものもあることに気づく。

【註9】 『イーリアス』におけるこのアキレウスの嘘にまつわる言辭、そして『オデュッセイア』におけるアルキノオスの嘘にまつわる言辭、いずれもオデュッセウスに対するものであり、かついずれも辛辣な皮肉を含んだものであることは興味深い。